

前 言

こんな時間に時間がかかるとは思わなかった。諸般の事情があったにせよ、本書の編集を考えて以来、思わぬ時間を要してしまったのである。わたくしは傘寿をむかえてしまった。

本書は宋代を領導した士大夫官僚の基層社会とその構成に関する研究である。本書は前著『宋代中国都市の形態と構造』（勉誠出版、二〇二〇年）と並ぶ、否、構想的にははるかに先立つ書である。後記でくわしく記すように、本書のもととなる発想は研究を始めた当時のわたくしをとりまく極めて身近な経験と問題意識から着想を得ている。

宋代の士大夫官僚は地方社会より出現し、都市に住んで鄉村社会を支配した。かれらは官僚採用試験たる科挙によつて採用された、帝国の忠実な官僚であった。科挙の採用はその根幹に儒教をおき、その習熟とそこからなる教養を基本とした。これは、以後の中国社会の根幹となった。ために、以後の中国社会にはおおくの知識人と教養人が誕生した。かれらは文化人でもあった。かれらは古典的知識や哲学に通じていたが、同時に詩文に秀で音楽や絵画などの知識も豊かであった。かれらが生み出した文化的資産については贅言を俟つまでもない。その知的な成果についてはおおくの業績が営まれているし、わが国への影響も議論されている。わが国とは歴史過程や社会構成はことなつたが、その影響は端倪すべからざるものがあつたのだ。かれらは宋代の知の担い手である、いわゆる士大夫官僚が生み出した成果は、体制の違いをこえておおくの影

響をあたえたのである。しかも影響は多岐にわたる。ここにかれらを生み出した社会を知る必要がある。そうした背景と基層社会を考える手掛かりをもとめたのが本書の基礎的発想である。つまりはかれらが基盤とした郷村とそこにおける地位はどのような構造と構成をもっていたのかを考えるものである。

幸いにして中国社会はこれらを探る多くの手掛かりを残している。のみならず、同様の手掛かりは日本の郷村社会にもある。たとえば、随所で祭りや行事などに際した寄進者の名前を掲げた掲示板や記録をみかけることがある。そこには、この催し事などに賛同、あるいは寄進した地元のひとつの名前がある。その名前などを手繰つていくと当該地を構成するひとつとそその構成が浮かび上がる。寄金高は個々の財力や地位を示す。中国社会も同様である。宋代でも同様であった。地方史には在地の有力者の名前が残され、所収された石刻資料などにも在地の道路工事などに出資したものの名前がのこる。ここから、特定地域を構成した地域社会がうかがえるのである。それだけではない。掲げられた寄進額やその順位からは、かれらの財力や当該地における地位まではかることができる。これらは宋代の地方から官界に登場したひとつとをさぐる手掛かりにもなると考えるのである。かれらこそは、地方に立脚し中央で活躍する士大夫官僚たちの基盤ではないか。

本書はこのような発想をもとに構想かつ構築されたものである。また、かれらの住んだ地域にはその状況をしる手掛かりがある。その手掛かりの一つが地名である。わが国でもそこに住んだ著名人ゆかりの地名が少なくない。地名は都市の構造を示すとともに、その地ゆかりのひとつも示すのである。本書はこのような発想を手掛かりに地域の指導者の存在やその社会をも探ろうとしたものである。

なお、本書所収の論文には再録に際して加筆したものがあつたことを明記しておく。考え方その他に変化はないが、表現その他に改めるところがあるためである。大方の批判を仰ぎたい。